

1. 開会・石川地域づくり表彰授賞式【会場：宝達志水町役場 2階大集会室】

○開会挨拶

主催者を代表して、岡山 敏弘石川地域づくり協会副会長から挨拶があった。

○石川地域づくり表彰授賞式

以下の団体・個人に石川地域づくり表彰の授与を行った。

【団体部門・優秀賞】

・加賀あいりすガイド（加賀市）

市内の各温泉地などで20年以上に渡り観光ボランティアガイドを実施しているほか、ふるさと検定などと連携したガイドの確保や養成、大手旅行会社と連携したガイド商品開発などに取り組み、年々ガイド件数を伸ばしている。

・シラミネ大学（白山市）

白山市白峰地区のU I ターン者を中心とした10代から30代の若者が、地域の自然・伝統を体験するイベントの実施、地元のPR動画制作などを通じて、賑わい創出や地域課題の解決に取り組み、住民の希望となっている。

【個人部門】

・濱田 清守氏（七尾市）

七尾市中島地区において、住民の防災意識の向上に努め、市で初となる地区防災士会を発足させたほか、自ら発起人となり閉館した公民館施設を活用して住民の活動拠点の維持を図るなど、住民主体の地域づくりを推進している。

・山本 進氏（七尾市）

七尾市高階地区の祭りなど伝統文化の継承などに取り組んだほか、移住者の受入環境整備に力を入れ、空き家調査や移住者と地元住民との交流創出などを主導し、20人近い移住者を地域に呼び込んできた。



受賞者集合写真

（前列左から、加賀あいりすガイド・畑島氏、シラミネ大学・山田氏、濱田氏、山本氏）

○審査講評

石川地域づくり表彰審査委員会を代表して、谷本 互審査委員会座長から、各受賞者の評価されたポイントについての講評があった。

○受賞団体・個人活動紹介

受賞団体・個人からそれぞれの活動について紹介をいただいた。



加賀あいりすガイド



シラミネ大学



濱田 清守氏



山本 進氏

2. 分科会紹介【会場：大集会室】

○オリエンテーション

濱 博一石川地域づくり協会専任コーディネーターより、分科会及び全体会の趣旨や概要、今回の円陣を通じて参加者に考えていただきたいことについて説明があった。

○分科会紹介

各分科会の代表者から参加者に対して、団体の活動の紹介や、この後の分科会でどういったことをテーマとするかについてのプレゼンがあった。

<第1分科会：宝活（宝達志水町）>

武田 玄氏（宝達志水町地域おこし協力隊、
石川地域づくり協会運営委員）



<第2分科会：たかしな地区活性化協議会（七尾市）>

任田 和真氏（七尾市地域おこし協力隊）
（分科会担当コーディネーターの森山 奈美
石川地域づくり協会専任コーディネーターとの
トークセッション）



<第3分科会：なかのとスローツーリズム協議会>

久保 勝康氏
（なかのとスローツーリズム協議会）



<第4分科会：かがやき舎（加賀市）>

山田 真奈美氏（かがやき舎）



2. 分科会

【第1分科会】

宝活30ヶ月のこれからライブトーク

～アメーバ型地域づくりの次のステップを考える～

<主催団体>

宝活（宝達志水町）

〔プロフィール〕

宝活（宝達志水をもっと楽しくする活動）では町民が「それぞれの楽しさ」を実現するために協働し、15グループが誕生。ピラミッド型組織ではなく、アメーバ型ネットワークで町民の参加や能動性を引き出してきた。20ヶ月にも及ぶ町役場からの支援を卒業して10ヶ月が経過。この次のステップとは？

<発表者>

全体会（担当：武田）

分科会（担当：武田、市村、中町、山田、元屋、杉谷）

<担当運営委員・コーディネーター>

【運営委員：武田】

【コーディネーター：赤須】

<会場>

大集会室 ステージ側

<参加者数>

20名（一般参加者13名、宝活5名、赤須、武田）

<進行の概要>

14:30～14:35 分科会の趣旨について説明（担当：赤須）

14:35～15:30 各団体の発表（担当：武田、市村、中町、山田、元屋、杉谷）

15:30～15:45 休憩

15:45～16:10 ワークショップ

16:10～16:20 まとめの発表

16:20～16:30 ワークショップの総括（担当：赤須）

<分科会の問題意識>

- ・お金がない、人がいないといったありきたりな問題意識ではなく、各団体の活動を楽しく継続していくには？といった、継続することへの課題を意識していた。

<団体発表の概要>

- ・各団体の今までの活動内容、活動実績の紹介を行った。

①自給自足を愉しむ会

活動の動機、「豆まきから味噌づくり」の説明など

②山あり海ありの会

団体名の由来について

海での釣り体験教室、宝達山への登山（こぶしの路経由）などの活動紹介。

③羽咋ドローンズ

活動報告：練習会・体験会・JDFMはくい・どろキャン

④クリーンピーチ&ビール

宝活で「クリーンピーチ&ビール」をしようと思ったきっかけや、2017年から行ったイベントを抜粋して写真付きで紹介。

その他、皆で発声練習しました。（声を出すことの重要性を知ってもらうため）

⑤やるまい会

やるまい会の発足の経緯と目的、活動の特徴についての説明。



<ワークショップの概要>

- ・形式：6～7人×3テーブル
- ・進行についてはフリー形式、宝活のメンバーが進行役を務めた。
- ・各テーブルで宝活のメンバーが今後、したいことについての課題、より楽しくなるような工夫を一般参加者から意見をいただいた。

①自給自足を愉しむ会

七尾市田鶴浜地区でも宝活と同様に住民で畑を管理して、味噌作りを実施した経緯があったとのこと（高齢化で断念）自然栽培での営農は大丈夫なのか？六次産業化の実践内容などについても、質問があった。

②山あり海ありの会

所司原キャンプ場（宝達志水町）の管理者が参加されており、来年に向けてそこの釣り体験イベントの開催を考えた。

③羽咋ドローンズ

A1用紙に「今日聞きたいこと・質問したいこと」と記し、参加者も含めての会議となった。「若者を呼んで欲しい」「お金を落として欲しい」という地元からの要望、閑散としているらしいキャンプ場でのイベント開催希望などがあがった。

④クリーンピーチ&ビール

最初は3人から始めた。2回目は女優さんと、と言ったことに対して「自分もこういう事があって、今はこうしている」と一人の参加者が発言してくれた。また、一度「クリーンピーチ&ビール」をしたいと言う人がいてくれた。

⑤やるまい会

空き家カフェ設立に向けた課題の洗い出しや白峰地区雪だるまカフェなどの他地区実例の情報共有を実施。

<まとめの概要>

- ・テーブルごとにワークシート（模造紙）をまとめた

①自給自足を愉しむ会

田鶴浜地区では、活動を継承する若手があられず活動継続がならなかったが、宝活では今後どのようにしていくか、課題が残る。



②山あり海ありの会

活動を考え、イベントの話を進める中で、所司原キャンプ場は施設の老朽化や整備不良などの問題が浮き彫りになった。町内の他の施設も同様の問題を抱えており、イベントのコラボについて容易には進まないことがわかった。

③羽咋ドローンズ

キャンプ場を盛り上げるためにできることとして釣り体験での利用、どろキャンでの利用があがり、それらに向けての行動をどうするかというところで時間切れ。

④クリーンピーチ&ビール

これから何かやりたいことがありますか、と質問があったが、時間切れになってしまった。

⑤やるまい会

- ・カフェを運営する主体が必要になる
- ・やるまい会とカフェ運営主体との関係性の整理が必要（カフェ運営にどこまで関わるのか）
- ・カフェ事業を成功させるのは容易ではない
- ・カフェ運営には覚悟が必要になる
- ・やめずに続けていけば失敗ではない

<感想>

(1) ワークショップについて

- ・ワークショップを仕切ることが苦手な人が多く、今後ファシリテーター講座の受講を検討していくといった思わぬ成果があった。
- ・他団体とのコラボについて前向きに検討していく声が多かった。
- ・発表機会が少ない団体にとっては貴重な機会だった。
- ・赤須さんの仕切りが良かった。一質問をしやすい雰囲気作り。

(2) 全体を通しての改善・問題点について

- ①イベント内容は良いのに、参加してもらいたい人に情報が伝わっていない。もったいない。
 - ・参加したいと思われるようなイベント内容の構築。－⑥
 - ・地域づくりに携わっているキーパーソンを掘り起こす。キーパーソンを中心にした情報拡散。

- ・キーパーソンであれば、地域づくりに関係する人に情報が伝わる。
- ②行政のやる気・窓口の有無によって情報の発信が左右される。
 - 下手をすると商工会の会長が無理矢理に参加してこいなどと周知している。
 - ・①のキーパーソンを中心にした情報拡散
- ③役場職員に対してイベント内容の周知を図ったが、当日も含めて行政職員の参加者は少数。
 - ・地域づくりに対する熱量は自治体ごとに相違があるため、行政に依頼する情報拡散をサブ的に考える。
 - ・①をメインの情報拡散方法として考える。
- ④石川地域づくり協会についての理解が深まるようなイベントではなかった。
 - ・協会についての告知タイムが必要ではないか。
- ⑤地域団体の成果報告が自慢話に終始してしまう。
 - ・意見交換、アイデア出しを意識したイベントにはしては
- ⑥イベント内容を再検討する。
 - ・イベントへの参加が義務化になるようなプログラムの構築
 - ・コーディネーター派遣を依頼した団体について、エリア会議や円陣にて成果報告、地域づくりについての答えを発表してもらう。
 - ・エリア会議、円陣を答えを発表する場にする。
 - ・答えを求めて参加者が集まるのでは？
- ⑦どんなイベントなのか参加者側からはいまいちわからない。
 - ・イベントに参加することで得られるメリットが明確になると良い。
 - ・⑥の答えをイベント内に置く。
- ⑧他団体の内容を知りたい、自分の団体発表に従事することで精一杯
 - ・資料をシェア、確認することはできるが、生の発表を聞くために映像化を検討してみてもどうかー固定カメラでも。
 - ・イベントについて映像化、オンラインにすることで遠地でも間接的なイベント参加は可能になる。

(3) 各団体からの感想

①クリーンピーチ&ビール

4つに分かれてそれぞれ特色ある分科会で良かったし、5分という時間の区切りはとても良い。

「クリーンピーチ&ビール」は今度いつやるの、て言ってくる人がいるが「あなたが来れる日にやります。」と答えます。実際に分科会で出会った人がビーチのゴミ拾いをしに来てくれ、コラボが生まれた。

正直、周囲の人たちは私が具体的に何をやっているか知られていないが、今回のイベントを通して町会議員さんに認知してもらえました。

スピーチ聞いてくれて「へーそうだったんだー」といった感想をもらえたほか、大勢の前でこういう事をやっていますと宣伝することができ、活動を認知してもらえたので良かった。

②やるまい会

直線的なベクトルの活動ではなく多方向を向いたまちおこし団体のため。これからの方向性について悩んでいたが、いろいろな活動団体があることを知って多くのヒヒントを得ることができた。

まちおこし団体が「イベント主催団体」のようになることに疑問を感じていたが、かがやき塾のようにまちの中に小さな炎をつけたいと思っている人を支援するような活動もあることを知った。

※その他の団体はアンケートに感想を記入したため省略

【第2分科会】

地域自治組織×地域おこし協力隊の可能性

～よそ者が入って持続可能性を高める～

<主催団体>

たかしな地区活性化協議会（七尾市）

〔プロフィール〕

コミュニティセンターの運営を主軸とする地域自治組織です。近年は地域おこし協力隊を受け入れ、移住・定住の取り組みを中心に活動を進めています。昨年度は移住体験住宅の運営や、廃校を活用した”逃走中（大規模おにごっこ）”イベントの実施、「集落の教科書」を出版するなどの活動をしてきました。

<発表者>

任田 和真（七尾市地域おこし協力隊）

<担当運営委員・コーディネーター>

【運営委員】三津井、竹内

【コーディネーター】森山

<会場>

宝達清水町役場 2階大集会室後方

<参加者数>

19名（コーディネーター・運営委員除く）

<進行の概要>

- 14:30～14:35 分科会に期待することを各自で記入（森山）
- 14:35～14:37 グループ毎で共有
- 14:37～14:40 どんな期待があるか、発表
- 14:40～15:20 活動の紹介（任田）
「地域おこし協力隊としての活動と課題について」発表
5つの課題（テーマ）提起
- 15:20～15:30 休憩
- 15:30～16:10 ワークショップ（各グループ）
テーマ毎にグループに分かれ、課題に対する対策、ヒントについて意見交換およびA4用紙に提案内容を取りまとめ
- 16:10～16:30 各グループから提案内容を発表
- 16:30～16:35 分科会の総括・終了（森山）



<分科会の問題意識>

高階地区の現状の活動状況と課題を参加者と共有し、課題解決のヒントおよび地区の未来について参加者から提案、ヒントをもらう

<課題>

- ①世代融合をすすめるには
- ②集落に新しい仕事をつくるには
- ③田舎のダイバーシティを高めるには
- ④コラボレーションのコツとは
- ⑤子どもの郷土愛を高めるには



<団体発表の概要>

- ・自己紹介
- ・まちづくり活動とは／地域おこし協力隊のミッションとは
- ・地域おこし協力隊として挑戦したこと
 - ①なんでもやります
 - ②金沢工業大学生と古民家リノベーション
 - ③廃校で逃走中、廃校でビアガーデン
 - ④地元企業とのイベント（スギヨと7.70メートルの恵方巻づくり）
 - ⑤集落の教科書
- ・見えてきた課題

上記<分科会の問題意識>の5つの課題



<ワークショップの概要>

- ・①～⑤のテーマ毎に5つのグループに分かれ、テーマの内容について深堀り
- ・テーマについての解決策、アイデアを話し合い
- ・話し合った結果を提案としてとりまとめ

<グループからの提案、ヒント>

○テーマ①世代融合

- ・役員の教科書をつくり、町会役員に定年制を設ける。
長年やってきた人のノウハウを役員の教科書にまとめる。
そして新しい役員に引き継ぐ。



- ・まちづくりに参加する方の対象を子育て世代にする。
子どものためならという気持ちをうまく動機づけにする。
子どものための行事（高階の伝統、特性生かす行事）を考え、子どもといっしょにお父さん、お母さんを町会行事に参加させる。
- ・世代を超えた対話から融合が生まれる。

○テーマ②仕事づくり

- ・ 廃校で寺小屋
年寄りの集まる場所で子どもをあずかり、年寄りに仕事を、若い親に安心を与え、仕事、遊びに出やすい環境をつくる。
- ・ 農業田舎の体験
農業経験のない方に農業を経験してもらう



○テーマ③ダイバーシティ

- ・ 最初が肝心
移住した経験から、なかなか地域になじめないことを感じた移住してきたときに、1か月以内にあいさつ会を開催する等、あの子は誰？状態をなくすのが大切

○テーマ④コラボレーションのコツ

- ・ メリットの見える化
お互いにWinWinの関係づくりをするには相手が喜ぶことを考え、見える化する
- ・ 組織ではなく、人とやる
組織に拘らず、この人とコラボするという感覚で進めるとどうか

○テーマ⑤子どもの郷土愛を育むには

- ・ 伝統
ここでしか味わえない遊び、伝統、歴史を子どもに伝える
子どもはどこにいても自分の地域をつまらないと感じている、東京の子どもたちもつまらないと感じている、他と比べないと良さは分からない、伝えることが大事
- ・ 疎開中
富山と渋谷区の交流でお互いの良さが気づく、他地域との交流があると自分の地域の魅力に気づく
- ・ 外志子
一度は地元から外に出すことによって、郷土の良さが分かる



<感想>

- ・ 各グループとも活発な話し合いがされ、いい提案、ヒントが出された。
- ・ いろんな経歴、立場の人が話し合うことでテーマを深掘りすることができた。
- ・ 3、4名程度での話し合いが最も意見が出やすいと感じた。
- ・ 参加者の年代、職業等が幅広く、問題意識も高かったため、多様な視点での議論ができた。
- ・ 1つの会場で、2つの分科会を開催するのは参加者、プレゼンターにとって両者にとって良くない。マイクが使えて、動画の音声が出せればさらに良い分科会となっていたと思うので、今後それぞれの分科会で部屋を確保できるようにしてほしい。

【第3分科会】

活動をより効果的に進めるために必要なことは？～アイデアを実現するために～

<主催団体>

なかのとスロースーリズム協議会（中能登町）

〔プロフィール〕

長期滞在型観光地をめざす町民有志の団体。地域に眠る貴重な資源を、人間が生活していく上で不可欠な「衣・食・住」で分類し、「誰もが持つ「やさしさ」というキーワードに価値を上乘せした調査検証を通じて、能登に流れるゆっくりした時間や空間、文化をツーリズムにつなげるため活動中。

<発表者>

久保 勝康（なかのとスロースーリズム協議会）

浅木 政宏（中能登間地域おこし協力隊）

<担当運営委員・コーディネーター>

【運営委員】高名 雅弘

【コーディネーター】水野 雅男

<会場>

さくらドーム2階 第1会議室

<参加者数>

13名（主催団体、担当運営委員・コーディネーター含む）



<進行の概要>

14:30～14:40 分科会の趣旨について説明・参加者自己紹介（担当：高名）

14:40～15:00 主催団体の活動について発表（担当：久保）

15:00～16:30 意見交換・分科会の総括・終了（担当：高名）

<分科会の問題意識等>

団体の目的や活動を知ってもらうとともに、より効果的に推進していくための仲間づくりや運営方法、推進体制、どうすれば活動を理解してもらえるか、何から始めればいいのかなどの意見交換を行いたい。

<団体発表の概要・意見交換の概要>

- ・危機感はあるか。お手本はあるかとの質問
- ・空き家のカテゴリー分けや能登上布等の着物鑑定会などに取り組んでいる。
（問題意識）・形が見えない。
 - ・宿泊するところが無い。

・行政が支援をしてくれない。

◆楽しむをキーワードに。

- ・お宝がたくさんある…能登上布のあこがれ、どぶろくが飲みたくなる等
- ・小さい目標をつくり、気持ちのうえでの達成感を享受できるように。
- ・小さな結果を積み上げることが大切である。
- ・ともかくやってみることが良い。
- ・活動の周知を町民に広げていくこと。
- ・若者との活動の温度差がある。(能登上布がわからない等)
- ・若い人が知る活動を、道の駅や高校生を巻き込んで行えばどうか。
- ・まずは、地元の人が能登上布や“どぶろく”を楽しみ、誇りに思っているか。
- ・インパクトが無い。
- ・オンリーワンのもので、そこに来る、来たい、ここだけの体験をできるように。
- ・インスタグラムなどで、一点突破のインパクトのあるオンリーワンを見つける。
- ・豊かさとは、豊かな生活文化と、人とふれあうこと。
- ・行政と住民の活動の役割が違う。
- ・地域住民が誇りを感じているのか。
- ・多様性と独自の生活スタイル。
小さな経済循環、農村の田畑の景観が資源になっている。
- ・町にお年寄りが休憩しているだけでも、よそ者には美になっている。
- ・アグリーツーリズム（ハウスメイドのウェルカムドリンクや家庭料理など）が参考になるのでは。
- ・レストランでは味わえない自家生産のものが喜ばれる。
- ・町並みを大切にして、人が居る、人の生活が垣間見ることができ、生活感があることが大事。

参考事例として

- ・マクロビオテックを取り入れた食事法や食事療法
- ・農地環境、歴史的建物（ガラッソ法による景観計画）、環境保全、有機農業の助成、地元食材の活用、原産地名称保護制度など。カンパリズムモという郷土愛。
- ・スローフード、スローシティ、暮らし方。
より人間的な暮らし方を考え、本物を追求しよう。
- ・アクターは誰？
行政・環境規制
技術伝承・農業生産者
経済支援・利用者
- ・県内の事例として
トレッキングとサイクリングの2つの商品
里山里海の景観が守られている
車が少ない→安全
食文化が豊か→地の物にこだわる
日常生活文化の体験→ローカリティ
- ・滞在する人が一日を過ごすイメージになっていない。
どういうふうな滞在のイメージをするのか。

<今後の取り組みへの意見>

- ・単体の組織が必要。
- ・継続するために、どのようにスタート台に立てば良いのか。
- ・次の一手が必要。
- ・誇りを持つ方法
着る。使ってみるなど、成功事例をつくる。
- ・素材として、郷土食（おにぎりのイメージ、具材。）大根の土鍋、お祭りのごっつお、報恩講の4品など。
- ・能登上布→手仕事→宿→手作り料理→どぶろく
- ・人に出会える。
- ・外の人おいしい。地元の人はずい。
- ・ビジョンを明確にする必要がある。クラウドファンディングに取り組むなど。

<まとめの概要>

- ・身銭を切ってやる人がいるかどうか。
- ・知ってもらうこと。
- ・オンリーワン
- ・滞在のイメージ、楽しさを探す
- ・地域の中で楽しみながらお金を回す。
- ・まずは先進地での情報交換が必要では。
- ・目標を見つけられるか。
- ・行動を起こす。すぐに出来ることから。
- ・地縁と支援が必要。



<感想>

- ・最初に取り組む課題として、地域の住民に活動を理解してもらうこと
- ・様々な先進事例を研究し、行動目標を絞り込むこと。
- ・地縁と支援を求め、地域の皆さんが当事者意識を高めて、楽しみながら活動を推進することが大切であるとのことであった。
- ・今後も、多くの皆様方との関係人口を築き、独自の活動に磨きをかけることが大切。

【第4分科会】

主体が自分のまちづくりを広めていく

～小さな領域のキーパーソンが活躍する地域を考える～

<主催団体>

かがやき舎（加賀市）

〔プロフィール〕

かがやき舎は【小さな想いを育て根付かせるまちづくり】と【地域を自分ごとに出来る人づくり】をテーマに活動しています。今年で5年目となる「かがやき塾」では、自分の関心を周囲と共有しながら自身の考えを深める「一人ひとりの地域づくり」の実践をサポートしています。

<発表者>

山田 真名美、飯貝 誠

<担当運営委員・コーディネーター>

【運営委員】渡辺 直英

【コーディネーター】

埴 正浩、柿谷 昭一郎

<会場>

さくらドーム2階 視聴覚室

<参加者数>

24名（うち一般参加者18名）



<進行の概要>

14:30 ○分科会の趣旨について説明（担当：埴 正浩）

主語が自分のまちづくりを広めていく

小さな領域のキーパーソン活躍する地域を考える

そのためにどうすればよいか

○主催団体の活動についての発表（担当 山田 真名美）

- ・2015年に加賀市東谷地区の人材発掘事業として、現在もアドバイザーである中尾寛明氏にお願いし、予算は農村集落活性化補助金を利用してスタート。しかし2年目の資金が確保出来ず、そこで地域おこし協力隊のメンバーが運営を引き継ぎ、活動費を利用して継続。
- ・4年目、将来に向けた自主財源化を目指しかがやき舎を設立。
「小さな想いを育て根塚せるまちづくり」と「地域を自分ごとに出来る人づくり」をテーマに活動しています。
- ・今年で5年目となる「かがやき塾」では、自分の関心を周囲と共有しながら

ら自身の考えを深め、「一人ひとりの地域づくり」の実践をサポートしています。

15:30 ○参加者への問いかけ（担当 飯貝 誠）

- ・かがやき舎の活動を知ってもらった上で、地域におけるキーパーソンならびに担い手の発掘方法や人材の育て方について意見交換したい。
- ・他地域の団体とのコラボの可能性を探りたい。

⇒参加者同士がワークショップで意見交換しながら、模造紙や付箋で気づきをまとめる（A班6名 B班6名 C班6名 計18名）

①自己紹介に入り自分たちの事について、15分間話す

②ワークショップ「私のまちの、キーパーソン！」

〔質問〕

今、かがやき塾にはこんな塾生が参加しています！

塾生は、試行錯誤しながらマイプランを考えていますが中々上手くいきません。

あなた方だったら彼らにどんな人を紹介しますか？

あなたの地域のキーパーソンを教えてください！

→その町のキーパーソンとして A、B、Cさんを仮に紹介し自分かその地域にいる共通している方を紹介し、その人について話し合う。



〔Aさん〕

副業に挑戦中のサラリーマン。頭の中には色々構想があるけれど、それを人に伝えるのが苦手。自分のプランを中々共感してもらなくて悩んでいる。

〔Bさん〕

今年移住したばかりで何からはじめてらいいか迷っているママ。口癖は「自分なんか」。本当はママ友以外の友達も欲しいけれど、きっかけが難しい……。

〔Cさん〕

将来自分のお店を持つため、アルバイトを掛け持ちしながら頑張るフリーランス。日々のことで精一杯で、夢へのアクションが進まない……。

→各班から、それぞれ地域に地域づくりのキーパーソンになれる人を探しあてた。

○各グループからの発表

- ・参加者への問いかけ（担当 埴 正浩）

設問「主催団体の活動やワークショップでの意見交換を通じての気づき」

問いかけについて、参加者同士がワークショップで意見交換しながら、模造紙や付箋で気づきをまとめる。

〔A班〕

Bさんのような方をこの班といて地域のキーパーソンとして紹介があった。東京からエンジニアとして一年前に古民家でオーディオを販売、趣味が多くダイビングなどもやっている。人間的な魅力があり、頼りがいのある人。

〔B班〕

Aさん、Bさん、Cさんなど地域のキーパーソンとしての紹介があった。

- ・Aさん：地域との交流、行動人＝めげずに頑張る、サラリーマン
- ・Bさん：カレン（生花店）人間的魅力、自分らしさ、地域に密着している（地元でバレーボールをしている）
行動力、人の話を聞いてくれる
- ・Cさん：自然農業をして3年、東京から移住、仕事を辞め自分の修行の為カフェを始める（ライフスタイル）。行動は前向き。

〔C班〕

地域のキーパーソンとして紹介があった。

エネルギーがあって情報や人が集まってくる。共感する人が集まる、興味のある人など、色々な人達を集められる人。

○分科会の総括・終了（担当 埴 正弘）

地域のキーパーソンになれる方は、共感力の高い人、低いとうばかりではなく、スター性よりも、身近な人にいる。半歩踏み出す力を与えてくれる、バンソウコのような人である＝伴走者になれる人。

<分科会の問題意識>

第4分科会では「かがやき舎」で学んでいることに色々な例題を出して、その地域に溶け込み活動できる人を発掘し、皆がその人と共感しあい、地域において、何ができるのか？それぞれの置かれた立場や、能力に応じた企業起こしや、地域の人たちの結びつきを強め、豊かな生活を求めていく。

<団体発表の概要>

- ・かがやき舎で学んで新しい出会いやつながりが出来た。
- ・15人よれば15人のキーパーソンができた。
- ・1人のカリスマより、皆が半歩の歩み。
- ・人の話をよく聞き、自分の素敵などところを見つける。

<ワークショップの概要>

6人の班を3卓、合計18名出「私のまちの、キーパーソン！」と題して例題を出し、

それをもとにワークショップを展開した。

<まとめの概要>

人それぞれ色々な才能や、能力、趣味を持っています。

その才能や、若い人ほど、自分がここで何をしたいのか、地域の人たちとどうかかわっていけよいか、分からなくなることが多々あります。

そんな時、「かがやき舎」のような色々な業種、移住者、若者などが集える場所において自分を発見し、一歩でも前に進む事が大事である。

<感想> (担当 柿谷 昭一郎)

今回第4分科会では、「かがやき舎」によるかがやき塾の活動を通して、そのまちのキーパーソンを探し、地域づくりを進めていこうというテーマでワークショップを行いました。6人ずつ3班に分かれて、「私のまちのキーパーソン！」と題し、かがやき塾にAさん、Bさん、Cさんのいろいろな方の参加者を設定して、ワークショップを開催したことは、自分も含め、自分の周りのキーパーソン探しに大変参考になり、問題の本質が浮き彫りになり、大変良いワークショップなり、成果が上がった。

4. 全体会 【会場：大集会室】

○進行担当

濱 博一 石川地域づくり協会専任コーディネーター

○概要

ワールドカフェ形式にて、分科会担当の団体や運営委員・コーディネーターがテーブルアンカーとなる形で、4つの分科会での学びのシェアを行った。

(各テーブルでのシェアの結果は次頁以降参照)

<ラウンド1>

- ①分科会ごとにテーブルを設けた後、参加者は当該分科会以外のテーブルに着席。
- ②テーブルアンカーから、担当の分科会でどのような学びがあったかをシェア。
- ③参加者から、それぞれが参加した分科会でどのような学びがあったかをシェア。



<ラウンド2>

参加者はラウンド1と異なる分科会のテーブルに移動。
テーブルアンカーはそのまま残る（以下、ラウンド3・4同じ）。
移動終了後、ラウンド1と同様に学びのシェアを行う。



<ラウンド3>

参加者はラウンド1・2と異なる分科会のテーブルに移動し、ラウンド1・2と同様に学びのシェアを行う。

<ラウンド4>

参加者は自らが参加した分科会のテーブルに移動し、ラウンド1～3を通じて得た、他分科会からの学びのシェアを行う。

<感想発表>

ラウンド4終了後、参加者のうち県外から参加された方から感想をいただいた。

- ・猪の問題やコミュニティバスなど、山を隔てて（宝達志水町と）同じことで苦悩している。今回参加して、自分達の地区の問題を外側から見直すきっかけになった。（氷見市からの参加者）
- ・県境を越えて相互交流する機会を増やしていきたい。（氷見市からの参加者）
- ・今この場にいる人1人1人がキーパーソンだと実感。何かをしたいという志縁と地縁の関わりがスムーズにあって、自分のやりたいことが地域の元気に繋がっている、楽しくやれているのがいいと思う。（佐賀市からの参加者）

○閉会

ワールドカフェ終了後、谷口 健一石川地域づくり協会運営委員長より挨拶があり、閉会となった。

